

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的研究(開拓)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H05491・20K20421

研究課題名(和文)「大学入試学」基盤形成への挑戦 真正な評価と実施可能性の両立に向けて

研究課題名(英文)"Challenging the Foundation of University Admission Studies: Balancing Authentic Assessment and Feasibility"

研究代表者

倉元 直樹(Kuramoto, Naoki)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：60236172

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 19,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は高大接続改革の推進を背景に計画されたが、開始直前にとん挫、大学入試の環境は一変した。さらに、2年目にCOVID-19が蔓延し、研究よりも先んじて大学入試場面で想定外の障壁に対する対応が必要な事態が生じた。一方、本研究では初年度に最初の成果として東北大学大学入試研究シリーズ第1巻「大学入試学の誕生」を刊行、本研究の主題である「大学入試学」基盤形成の重要性を訴えた。2年目の後半からはCOVID-19への対応を主題とした研究が多くを占めるようになった。当初計画通りの構想には完全に合致しなくとも、様々な角度から学問としての大学入試研究の可能性を追究することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究期間内に東北大学大学入試研究シリーズ第1巻(先述)、第3巻「変革期の大学入試」、第4巻「大学入試の公平性・公正性」、第5巻「大学入試を設計する」を上梓し、大学入試学の概要を描くことができた。大学入試学の基盤形成という表現が何を意味するのか、具体的に社会に発信した意義は大きいと思われる。著書その他、本研究の研究期間において合計30編に及ぶ学術論文等を輩出した。なお、本研究の成果物は本科研費ウェブサイト(<http://adchan.ihe.tohoku.ac.jp/>)で閲覧可能である。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to promote reforms in higher education articulations but faced setbacks due to significant changes in the environment surrounding university entrance exams. The spread of COVID-19 in the second year created unexpected challenges that needed to be addressed in the context of university admissions before conducting the research. However, in the first year, the publication of the first volume of the Tohoku University Admission Research Series marked an important achievement, highlighting the significance of establishing the foundation of "admission studies." During the latter half of the second year, research on COVID-19 responses became a major focus. Although deviating from the initial plan, the study explored the potential of university entrance exam research from various perspectives as an academic discipline.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学入試学 入試設計 新型コロナウイルス感染症 公平性 真正な評価 実施可能性 国際比較 個別大学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を取り巻く環境自体が、予測不能な形で研究期間内に大きく変化した。そのため、当初の背景から研究期間の後半に至るまでの状況について時系列的に概説することが必要となる。

### (1) 研究計画調書執筆時の状況

平成26（2014）年末に公表された中教審答申、いわゆる「高大接続答申」に端を発する大学入学者選抜の抜本改革によって、大学と高校の過剰負担が懸念されていた。導入予定は令和3（2021）年度入試。本研究は、まさに改革初年度の入試への準備が具体的に始まった時期に構想されたものである。

高大接続改革では評価の真正性が求められる一方で、時間的人的コストが等閑視されていた。本研究は、従来の労力注入志向を転換、真正性と同時に効率性、信頼性、公平性を追求し、実施可能性の高い入試方法の開発を目指すことを掲げた。さらに、従来、理念と現実の狭間で定見なく大きく揺れてきた大学入試制度に対して、様々な分野の研究手法の学際的融合により「大学入試学（Admission Studies）」という学術分野を成立させて、安定的な改善を目指すべく、基盤となる理論及び実践モデルの提示を目的とした挑戦的研究として計画された。

### (2) 研究開始年度の状況

本研究の開始から約半年経過した令和元（2019）年10月頃から、高大接続改革の目玉であった英語4技能の測定を目指した民間試験と大学入学共通テストへの記述式問題の導入計画が相次いで頓挫した。このような事態に至った経緯を検証すべく、「大学入試のあり方に関する検討会議」がスタートした。受験を控えた高校生にとって大きく動揺する状況であったと同時に、本研究にとっても前提となる研究環境が大きく変化した。

### (3) 新型コロナウイルス感染症の蔓延と大学入試

令和2（2020）年に入ると、中国湖北省武漢市が起源とされる新しい感染症、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が日本国内でも蔓延し始めた。令和元（2019）年度末には最初の緊急事態宣言の下、全国で学校機能が数か月間にわたってほぼ完全に停止するという未曾有の状況に陥った。対面の教育活動の代替とすべく、急遽、学校現場にオンライン技術が導入されるなど、教育関連活動の方法が大きく変化していった。また、5月頃には学習期間の確保のために9月入学が取り沙汰されるなど、学校や入試を巡る議論が激しく揺れ動いた。

そのような中、高大接続改革の初年度となるはずだった令和3（2021）年度入試の実施に当たっては、コロナ環境の下での感染防止や感染したと疑われる受験生への特別措置といった、歴史上、経験したことのない困難に直面しながら、試行錯誤が行われた。

### (4) 大学入試を取り巻く環境が激変する中での本研究の位置づけ

本来、本研究は教育現場の現状や過去の入試改革の失敗の歴史から学ぶとともに、幅広い学問分野の知見を集めて受験生にとって安心かつ安定的な大学入試制度の確立を目指すための理論的、技術的基盤の構築を目指したものであった。ところが、本研究の研究期間における環境の変化はあまりにも激しかったが故に、個々のテーマについて研究する時間的ゆとりもなく、これまでの研究活動の成果を実践場面で問われるような状況がいきなり訪れた。

一方、2021（令和3）年度からは、COVID-19への対応を目的とした新たな研究プロジェクト（科学研究費助成事業〔科学研究費補助金〕基盤研究〔A〕〔一般〕課題番号21H04409「コロナ禍の下での大学入試政策及び個別大学の入試設計のための総合的入試研究」）が採択された。それによって、本研究の志向性もCOVID-19の問題のみに偏ることなく、「大学入試学」の基盤形成という当初の目的に立ち返った研究活動が可能となったが、それからほどなく研究期間を終える巡り合わせとなってしまった。

## 2. 研究の目的

過去30年ほど入試改革の流れは評価の真正性の追求にあったが、高大接続改革によって大学入学者選抜に抜本変革が迫られる事態となった。真正な入試の難点は膨大な手間暇と評価の妥当性・信頼性、公平性の確保にある。従来、大学入試場面での真正な評価の試みは理念と現実の狭間で大きく揺れてきた。それはひとえに現場の問題を総合的、俯瞰的にとらえる学術的視点の欠如によると考えられる。

本研究は、大学入試に関わる研究を学際的研究手法の融合により「大学入試学（Admission Studies）」という学術分野として確立させるため、評価の真正性と効率や公平性のバランスを取り、実施可能性の高い大学入学者選抜方法の開発を通じて基盤となる理論及び実践モデルを提示することを目的として掲げた。

### 3. 研究の方法

研究課題を堅実型選抜方法と挑戦型選抜方法に分類、班方式の研究組織に基づいて、それぞれ効率性、妥当性・信頼性、公平性を担保する選抜方法の開発を試みることにした。当初掲げた研究テーマは以下の通りである。本研究の区分が挑戦的研究であることから、これらの中から先述の目的に照らして研究期間内で実を結ぶテーマについて、集中的に検討する予定であった。

#### 〔堅実型選抜方法研究グループ〕

1. 書類審査開発班：公正かつ効率的な調査書，ポートフォリオ評価様式の開発
2. 面接試験開発班：面接のルーブリック作成技法，面接員マニュアルの開発
3. 記述論述問題開発班：記述式，論述式問題のルーブリック作成技法の開発

#### 〔挑戦型選抜方法研究グループ〕

1. 4技能評価開発班：英語外部試験の性能分析，公平で効率的な利用法の開発
2. CBT開発班：入学者選抜のデジタル化について，技術的観点から開発
3. 新評価方式開発班：新方式入試を事例に，持続可能な新評価のひな型の開発

実際には、研究開始直後に起こった高大接続改革の方向転換と COVID-19 の蔓延によって、研究課題が入試実施場面から大きく広がる結果となった。すなわち、改めて大学入学者選抜の根本理念を問うような課題から、コロナ環境という特殊な状況への対応、大学選択行動や入試広報活動の変化といったところまでを射程に収めることとなった。

### 4. 研究成果

本研究の研究成果は 289 ページから成る「研究成果報告書」としてまとめられている。冊子体のほか、本研究のウェブサイトにおいて閲覧することが可能である。以下は、当該の報告書が掲載されている URL である。

<http://adchan.ihe.tohoku.ac.jp/wp-content/uploads/2023/03/2a7762e2c51578ea3d74fb6654b02f8b.pdf>

以下、研究成果報告書から、その一部を抜粋して報告する。

#### (1) 令和元（2019）年度の研究成果

東北大学大学入試研究シリーズ第1巻『『大学入試学』の誕生』を上梓した。3部12章の構成となっている。第1部『『大学入試学』構想の軌跡』では、第1章「受験生保護の大原則と大学入試の諸原則」において、わが国の大学入学者選抜の根本に存在する無意識の理念と入試設計の原則について解き明かした。第2章「国立大学におけるアドミッション・オフィスの系譜」では、大学入試を科学化するという1970年代以降の文部省の政策理念について執筆された論文を再録した。第3章～第5章には、東北大学の事例および国立大学におけるアドミッションセンターについての論考を再録した。第2部「大学入試研究の実情と課題」では、第6章～第8章で従来から行われてきた大学入試研究及び研究者養成に関する論考を再録した。第3部「大学入試研究の可能性」では、大学入試学という分野の射程の広がりを示すため、第9章、第10章では入試ミスに関する研究、第11章、第12章が東北大学における2つの事例研究を再録した。

#### (2) 令和2（2020）年度の研究成果

東北大学大学入試研究シリーズ第3巻「変革期の大学入試」を上梓したほか、11件の研究論文、学会発表等を行った。そのうちのいくつかについて概要を紹介する。

##### ① 宮本友弘編 東北大学大学入試研究シリーズ第3巻『変革期の大学入試』

「変革期の大学入試」は、令和元（2019）年5月15日に行われた第30回東北大学高等教育フォーラム「入試制度が変わるとき」の記録を基に構成された書籍である。したがって、高大接続改革への対応がテーマとなっている。第1部では、第1章で共通第1次学力試験導入期、第2章で大学入試センター試験への転換期の出来事をテーマとした論考が収められている。第2部は高校の立場からの論考を3編（第3章～第5章）、第3部では英語、国語といった教科の視点、受験生に対する調査、東アジアの国際比較の論考4編（第6章～第9章）が収められている。第4部はフォーラム当日のパネルディスカッションの記録である。

高大接続改革が実現に向かって突き進んでいた時に、それぞれの論者が何を考え、どのように対応しようとしていたのかを見て取ることができる。

##### ② 倉元直樹・宮本友弘・長濱裕幸 「高大接続改革に対する高校側の意見とその変化——『受験生保護の大原則』の観点から——」

東北大学では、大きな制度変更が予定されていた令和3（2021）年度入試に際し、高校調査を実施した上で、改革の初年度は英語民間試験の導入を見送る等の「予告」を公表していた。本研究は、令和4（2022）年度入試に向けての参考とするために、改めて東北大学の基本方針に関し

で高校調査を実施した結果をまとめたものである。特に、文部科学省が導入延期を決めた英語民間試験に対する対応については、2回の調査結果を比較して意見の異同を確認した。その結果、高等学校側は東北大学の基本方針を強く支持していることが分かった。なお、「受験生保護の大原則」とは、前年度公表した『大学入試学』の誕生から引用したことばである。

③ 倉元直樹・尹得霞 「わが国の高大接続改革と中国、韓国、大学入試多様化政策——特に中国の入試改革との同型性、共時性を中心に——」

コロナ禍に突入する寸前、令和元(2019)年1月に本研究の一環としての中国調査を行った。その記録に基づく論考である。高大接続改革が頓挫した直接の原因は、政策が具体化する段階で、現場が直面する諸課題を克服できなかったことにある。しかしながら、そもそも最初から答申が描く高校教育と大学入試の諸課題は、わが国の実情に合致していなかったのではないかという疑問があった。本研究では、相互に影響しながら進められてきた東アジアの大学入試政策、特に中国の大学入試改革関連の政策文書に焦点を当て、そこからわが国の高大接続改革の政策的基盤との同型性、共時性に関する仮説的推論を試みた。

④ 宮本友弘・倉元直樹・長濱裕幸 「東北大学における一般入試前期日程志願者の学力水準の経年分析——過去3年間の大学入試センター試験成績から——」

東北大学の一般入試前期日程志願者の学力水準の経年変化について、大学入試センター試験の「国語」「数学Ⅰ・A」「数学Ⅱ・B」「英語」の3年間の成績を分析した。その結果、AO入試Ⅲ期の合格者の成績は一貫してそれ以外のものよりも高く、AO入試Ⅲ期が狙い通りに機能していることが分かった。AO合格者を除く前期日程志願者の成績は学部等に関わらず安定していた。さらに、3年間の成績を指標にして志願者の出身都道府県を分類すると、倉元(2007)と同様の結果が得られた。そのうち、東北地方の3つの県から成る群の学力水準が他の群に比べて低く、地域特性の詳細な分析が今後の課題として残った。

⑤ 秦野進一・倉元直樹・長濱裕幸 「大学入試英語問題における設問形式による識別力比較——英文和訳・和文英訳の機能を中心に——」

英語教育で4技能重視の流れが定着する一方、伝統的な英文和訳・和文英訳の意義が問われている。本研究では東北大学個別学力検査「英語」について設問形式別に項目分析を行い、大学入試における英文和訳・和文英訳の役割を探った。分析の結果、英文和訳は識別力のばらつきが大きかった一方、和文英訳、自由英作文等のライティング問題は識別力のばらつきが小さく、安定して総合得点への寄与が見られた。受験者の学力を多面的に測定するために多様な問題の出題が望ましいことなどが示唆された。

⑥ 久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘 「オンラインによる高校教員向け入試説明会の実践と評価」

COVID-19の蔓延を受け、東北大学では従来の高校教員向け入試説明会を、急遽、対面からオンラインに切り替えた。オンライン入試説明会は7月13日～8月7日に41回実施され、226名が参加した。152名が回答したアンケート結果によれば、説明会の実施時期、時間帯、内容について9割以上から肯定的な回答が得た。

⑦ 倉元直樹・林如玉 「大学入試における少人数を対象としたオンライン筆記試験の可能性——大学の授業における期末考査をモデルケースとして——」

令和3(2021)年度入試に対するCOVID-19の影響が懸念されたことから、本研究は大学の期末考査を利用して、大学入学者選抜場面を想定したオンライン筆記試験の実施可能性を検討した。試験監督のみをオンラインに置き換えるという発想で、少人数を対象とした実施が不可能ではないことが示されたが、不正行為防止、受験環境、通信環境の確保等において、多くの検討課題が残された。

(3) 令和3(2021)年度の研究成果

東北大学大学入試研究シリーズ第4巻「大学入試の公平性・公正性」、第5巻「大学入試を設計する」を上梓したほか、9編の研究論文、学会発表等を行った。そのうちいくつかについて概要を紹介する。

① 西郡大編 東北大学大学入試研究シリーズ第4巻『大学入試の公平性・公正性』

3部構成、9章から成る。主として過去に編者らが公表した大学入試の公平性に関する研究論文から8編を再録し、書き下ろしの「第9章 公平・公正な入試の実現と個別選抜の在り方」を加えた構成となっている。第1部「大学入試における公平性・公正性の捉え方」では、まず、大学入試の分野における公平性を理論的に「社会的アプローチ」「心理測定論的アプローチ」「社会心理学的アプローチ」に分類し、社会心理学的アプローチの有効性が高いことを示した(第1章)。さらに、受験当事者の心理から、改めて大学入試の公平性概念について整理した(第2章)。

第2部「さまざまな選抜・評価場面に見る公平性・公正性」では、一般入試、AO入試といった入試区分、面接試験、英語リスニング試験等、具体的な場面に焦点を当てた6つの論考(第3章～第8章)が再録されている。第3部は書き下ろしのまとめ(第9章)である。

② 宮本友弘・久保沙織編 東北大学大学入試研究シリーズ第5巻『大学入試を設計する』

「大学入試を設計する」は、令和2(2020)年9月23日にコロナ禍の下、来場参加とオンライン参加のハイブリッド方式で行われた第32回東北大学高等教育フォーラム「大学入試を設計する——『大学入試研究』の必要性とその役割——」の記録を基に構成された書籍である。第1部「エビデンスに基づく大学入試」では、エビデンスとは何かを解き明かした上で(第1章)、高大接続改革(第2章)、主体性評価(第3章)といった個別テーマにアプローチしている。第2部「個別大学の入試設計」では3つの大学の事例(第4章～第6章)が紹介され、第3部「高校教育と大学入試」では高校側の視点が紹介されている(第7章、第8章)。第4部「わが国の大学入試の展望」では、討議の内容とともに令和2(2020)年度「③」の論文が一部加筆修正の上、再録されている。

③ 南紅玉 「大学入試における各国の COVID-19 対策——日本、中国、韓国の共通試験を事例に——」

表記3カ国では、大学入試の変革期に COVID-19 の蔓延が重なった。3カ国の大学入試における COVID-19 対策を比較した。中国は1か月延期、韓国は2週間延期して共通試験が実施され、日本は追試験を2週間後に設定することとなった。感染対策には違いが見られたが、コロナ禍にあっても例年通りの実施を追求するという姿勢では共通点があった。

④ 倉元直樹・宮本友弘・長濱裕幸 「COVID-19 蔓延下における個別大学の入試に関する高校側の意見」

初めて迎える COVID-19 蔓延下の入試において、東北大学が個別大学として万全な体制での実施を模索するために、AO入試Ⅱ期、Ⅲ期、一般選抜を対象に高校調査を行った。令和2(2020)秋の時点では、筆記試験に関しては地方会場の設置、面接試験はオンラインの希望が多かった。

⑤ 末永仁・倉元直樹 「私立大学定員管理の厳格化が東日本の公立校等学校に与えた影響——地域と進学実績を説明要因として——」

平成28(2016)年度入試から私立大学定員管理厳格化が始まった。若者の大都市圏集中を抑制することを目的とした政策だが、本研究では実際に政策がどのような影響を与えたかを探った。志願者が多く、難易度も高い東京都内の大学への合格者数を指標として、定員管理厳格化前後の東日本の公立高校の志願動向を分析したところ、北関東と東北の中核都市、首都圏・東京の郊外の高校にはダメージが見られたが、逆に首都圏・東京の都市部の高校は相対的に大きく進学実績を伸ばしていた。首都圏・東京23区に位置する高校と北関東、東北、北海道に位置する高校の間に顕著な格差拡大傾向が見られた。

(4) 令和4(2022)年度の研究成果

10編の研究論文、学会発表等を行った。そのうちの数点について概要を紹介する。

① 林如玉・倉元直樹 「大学進学における進路選択プロセスに関する日中比較研究——情報収集活動を中心に——」

日中ともに高等教育の大衆化が進んだ一方で、中国では現在でも画一的な大学入試制度となっている。本研究は令和元(2019)年度、すなわち、COVID-19 蔓延以前の両国の高校生の大学選択行動の実態比較に関する質問紙調査を行った。その結果、日本の高校生は中国の高校生よりも頻りに情報収集活動を行い、志望大学の決定をより早い段階で行うことが分かった。背景要因としては入試制度の違いのほか、高校における進路指導体制の充実度の違いが考えられる。

② 倉元直樹・宮本友弘・久保沙織・長濱裕幸 「新学習指導要領の下での大学入試——高校調査から見えてきた課題——」

令和4(2022)年度から学年進行で実施の学習指導要領の下での最初の選抜機会は令和7(2025)年度入試となる。本研究は、高校調査から新課程入試の課題を検討した。新しく導入される「情報」を国立大学で課す、という国立大学協会の方針については、大勢が反対であった。過重負担、情報を担当する教員の不足、地域間格差等のほか、科目「情報Ⅰ」が試験に適さない、といった意見が見られた。情報教育が求められる時代背景を前提としても、共通テストへの導入に関する高校現場の理解は伴っていない。大学側に早期の予告公表を求められる条件の下、最適な入学者選抜制度に向けての模索が続く。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 12件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 Koizumi Rie	4. 巻 19
2. 論文標題 L2 Speaking Assessment in Secondary School Classrooms in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Language Assessment Quarterly	6. 最初と最後の頁 142～161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/15434303.2021.2023542	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 南 紅玉	4. 巻 17
2. 論文標題 大学入試における各国のCOVID-19 対策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本テスト学会誌	6. 最初と最後の頁 61～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24690/jart.17.1_61	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 倉元直樹、宮本友弘、長濱裕幸	4. 巻 32
2. 論文標題 COVID-19蔓延下における個別大学の入試に関する高校側の意見	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 末永仁、倉元直樹	4. 巻 32
2. 論文標題 私立大学定員管理の厳格化が東日本の公立校等学校に与えた影響 地域と進学実績を説明要因として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮本友弘、久保沙織、倉元直樹、長濱裕幸	4. 巻 32
2. 論文標題 東北大学志望を促進する要因の検討 新入学者アンケートから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 倉元直樹・宮本友弘・長濱裕幸	4. 巻 16
2. 論文標題 高大接続改革に対する高校側の意見とその変化 「受験生保護の大原則」の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本テスト学会誌	6. 最初と最後の頁 87-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久保沙織・南紅玉・樫田豪利・宮本友弘	4. 巻 31
2. 論文標題 オンラインによる高校教員向け入試説明会の実践と評価	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 394-400
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 倉元直樹・林如玉	4. 巻 31
2. 論文標題 大学入試における少人数を対象としたオンライン筆記試験の可能性 大学の授業における期末考査をモデルケースとして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 338-344
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 秦野進一・倉元直樹・長濱裕幸	4. 巻 31
2. 論文標題 大学入試英語問題における設問形式による識別力比較 英文和訳・和文英訳の機能を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 140-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本友弘・倉元直樹・長濱裕幸	4. 巻 31
2. 論文標題 東北大学における一般入試前期日程志願者の学力水準の経年分析 過去3年間の大学入試センター試験成績から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 134-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 倉元直樹・尹得霞	4. 巻 31
2. 論文標題 わが国の高大接続改革と中国, 韓国, 台湾の大学入試多様化政策 特に中国の入試改革との同型性, 共時性を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学入試研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 83-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 周睿嫻	4. 巻 17
2. 論文標題 大学入試一般選抜における出願プロセスの日中比較 自己採点制度を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本テスト学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郭伊晗	4. 巻 17
2. 論文標題 大学選択時の親子関係に関する日中比較研究の展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本テスト学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 南紅玉	4. 巻 17
2. 論文標題 大学入試における各国のCOVID-19対策 日本, 中国, 韓国の共通試験を事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本テスト学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 林如玉、倉元直樹
2. 発表標題 高大接続改革が高校生に及ぼす影響に関する日中比較研究 大学選択方略を巡る高校生活の実態を中心に
3. 学会等名 日本テスト学会第19回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 倉元直樹、久保沙織、服部佳功
2. 発表標題 東北大学歯学部一般選抜における面接試験導入の効果
3. 学会等名 日本テスト学会第19回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 倉元直樹
2. 発表標題 反復試行における反応のゆらぎを表すパラメタを組み込んだIRTモデルの提案
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 倉元直樹、宮本友弘、長濱裕幸
2. 発表標題 COVID-19蔓延下における個別大学の入試に関する高校側の意見
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第16回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秦野進一
2. 発表標題 英語長文読解用素材文の客観的難易度分析の方法について リーダビリティ指標と語彙レベル分析ツールを用いて
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第16回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本友弘、久保沙織、倉元直樹、長濱裕幸
2. 発表標題 東北大学志望を促進する要因の検討 新入学者アンケートから
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第16回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 末永仁、倉元直樹
2. 発表標題 私立大学定員管理の厳格化が東日本の公立校等学校に与えた影響 地域と進学実績を説明要因として
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第16回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 倉元直樹・尹得霞
2. 発表標題 中国の大学入試政策 韓国, 台湾, そして, わが国における高大接続改革との関連性を中心に
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第15回大会研究発表予稿集 (オープンセッション用)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田照久・橋本貴充・山地弘起
2. 発表標題 センター試験志願者の暦年齢別の構成比率の特徴
3. 学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会第15回大会研究発表予稿集 (オープンセッション用)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田照久・橋本貴充・山地弘起
2. 発表標題 センター試験志願者の暦月年齢別の対人口構成比率の推移
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会発表論文集
4. 発表年 2020年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 倉元直樹、宮本友弘、久保沙織	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 212
3. 書名 大学入試を設計する	

1. 著者名 倉元直樹、西郡大	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 228
3. 書名 大学入試の公平性・公正性	

1. 著者名 倉元直樹、宮本友弘	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 220
3. 書名 変革期の大学入試	

1. 著者名 倉元直樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 204
3. 書名 「大学入試学」の誕生	

## 〔産業財産権〕

〔その他〕

「大学入試学」基盤形成への挑戦 - 真正な評価と実施可能性の両立に向けて - 研究報告  
<http://adchan.ihe.tohoku.ac.jp/report/>  
 「大学入試学」基盤形成への挑戦 真正な評価と実施可能性の両立に向けて  
<http://adchan.ihe.tohoku.ac.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮本 友弘  (Miyamoto Tomohiro)  (90280552)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授   (11301)	
研究分担者	久保 沙織  (Kubo Saori)  (70631943)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授   (11301)	
研究分担者	田中 光晴  (Tanaka Mitsuharu)  (00583155)	国立教育政策研究所・国際研究・協力部・フェロー   (62601)	
研究分担者	南 紅玉  (Nan Hongyu)  (60811271)	札幌医科大学・医療人育成センター・講師   (20101)	
研究分担者	小泉 利恵  (Koizumi Rie)  (70433571)	清泉女子大学・付置研究所・教授   (32632)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安成 英樹 (Yasunari Hideki) (60239770)	お茶の水女子大学・基幹研究院・教授  (12611)	
研究分担者	西郡 大 (Nishigori Dai) (30542328)	佐賀大学・アドミッションセンター・教授  (17201)	
研究分担者	銀島 文 (Ginshima Fumi) (30293327)	国立教育政策研究所・教育課程研究センター基礎研究部・総合研究官  (62601)	
研究分担者	内田 照久 (Uchida Teruhisa) (10280538)	独立行政法人大学入試センター・研究開発部・教授  (82616)	
研究分担者	伊藤 博美 (Ito Hiromi) (10883423)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・特任教授  (11301)	削除：2021年3月31日
研究分担者	山地 弘起 (Yamaji Hiroki) (10220360)	独立行政法人大学入試センター・研究開発部・教授  (82616)	削除：2020年3月31日
研究分担者	泉 毅 (Izumi Tsuyoshi) (30828447)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・助教  (11301)	削除：2019年11月28日

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------